

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞
口永良部島では、新岳火口付近及び古岳付近の浅いところが震源と推定される火山性地震が増加しています。

火山活動が高まった状態となっていることから、本日（26日）04時40分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね1kmの範囲（図1）では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、火山性地震が17日から本日（26日05時時点）までの10日間で100回発生しています。火山性地震は山体の浅いところで発生しており、震源は主に古岳付近で、新岳火口付近でも時折発生しています。火山活動が高まった状態となっていることから、口永良部島では火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

昨日（25日）に実施した気象庁機動調査班（JMA-MOT）による山麓からの現地調査では、新岳及び古岳の地熱域は雲のため確認できませんでした。なお、19日から20日に山麓から実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域を確認しましたが、地熱域の温度に特段の変化は認められませんでした。古岳においても特段の変化は認められませんでした。

噴煙の状況は本日から入ってからは雲のため不明ですが、昨日は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上100mまで上がりました。地震増加前後で噴煙の状況には変化はみられません。

本日05時までには、規模の大きな火山性地震は観測されておらず、新岳西側山麓付近の火山性地震や火山性微動は観測されていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、1日あたりの火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は少ない状態が続いています（5月：検出限界未満～20トン、6月：20トン）。

GNSS 連続観測では、2021年2月頃からみられていた基線の縮みは同年5月頃より停滞しています。

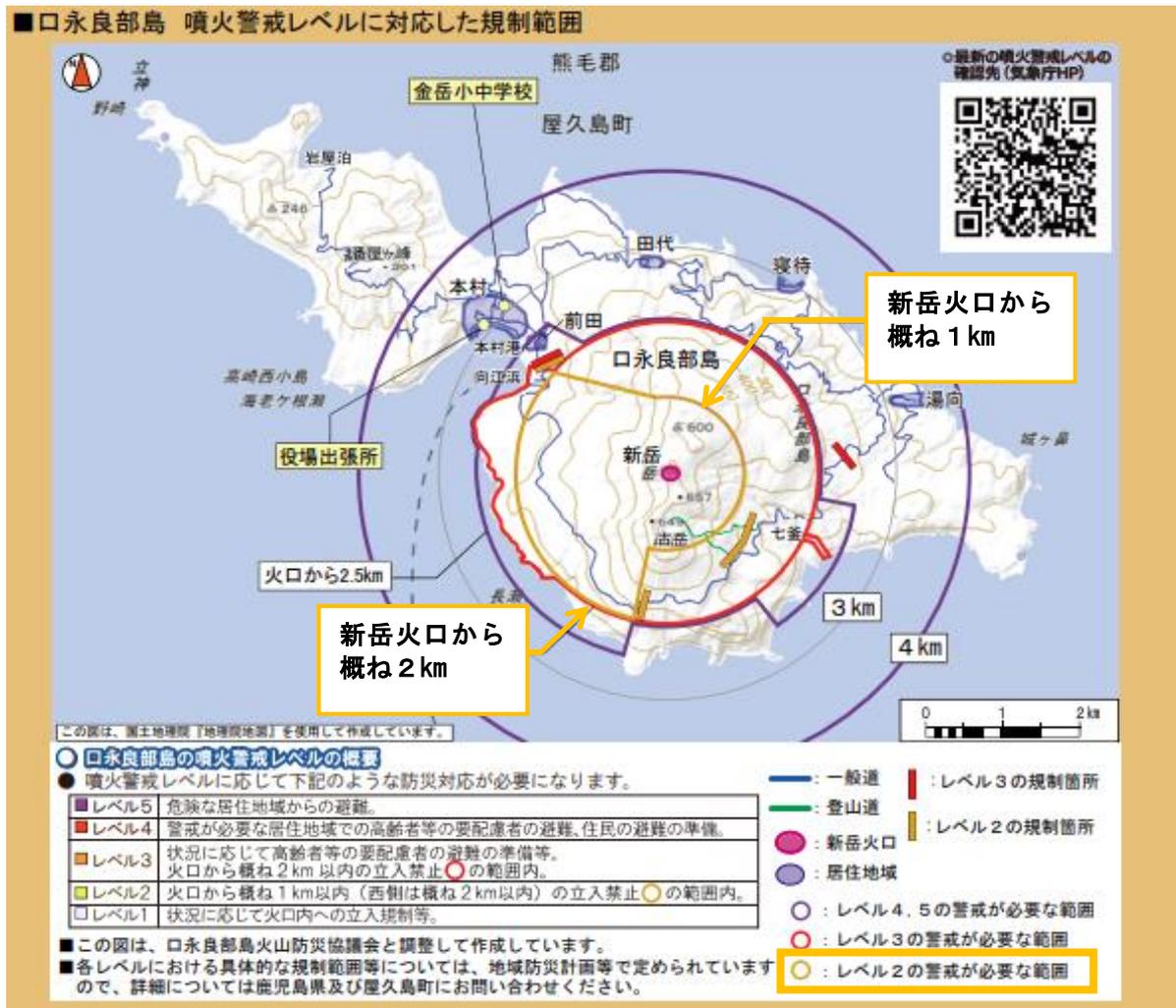


図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

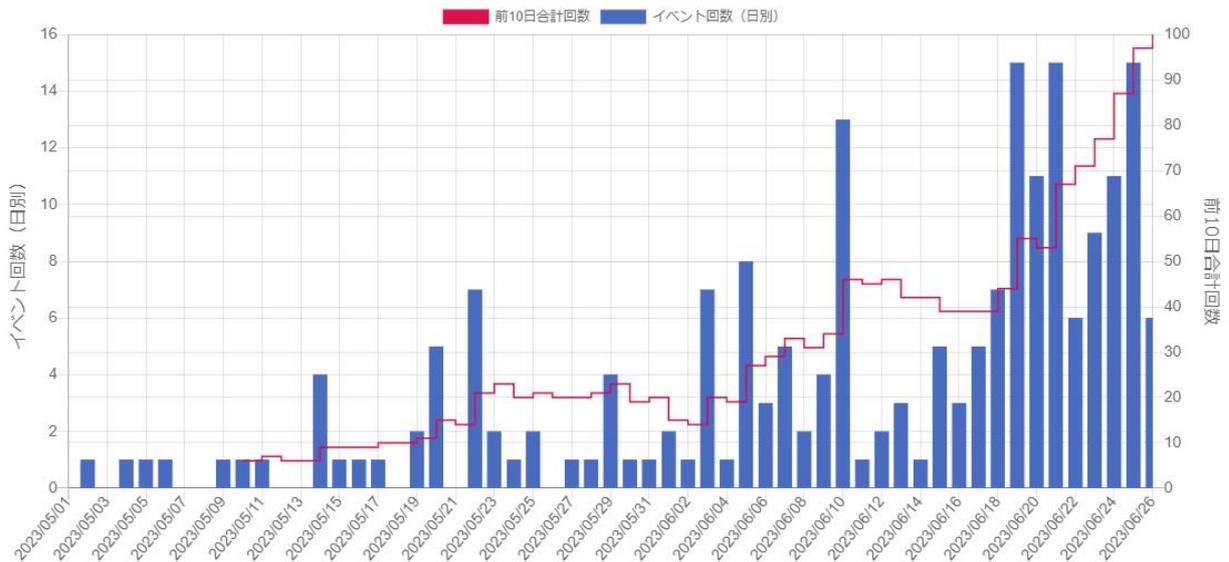


図 2-1 口永良部島 火山性地震の日別回数と前 10 日間の積算回数 (2023 年 5 月 1 日～6 月 26 日 05 時)

火山性地震が 17 日から本日 (26 日 05 時時点) までの 10 日間で 100 回発生しています。火山性地震は山体の浅いところで発生しており、震源は主に古岳付近で、新岳火口付近でも時折発生しています。

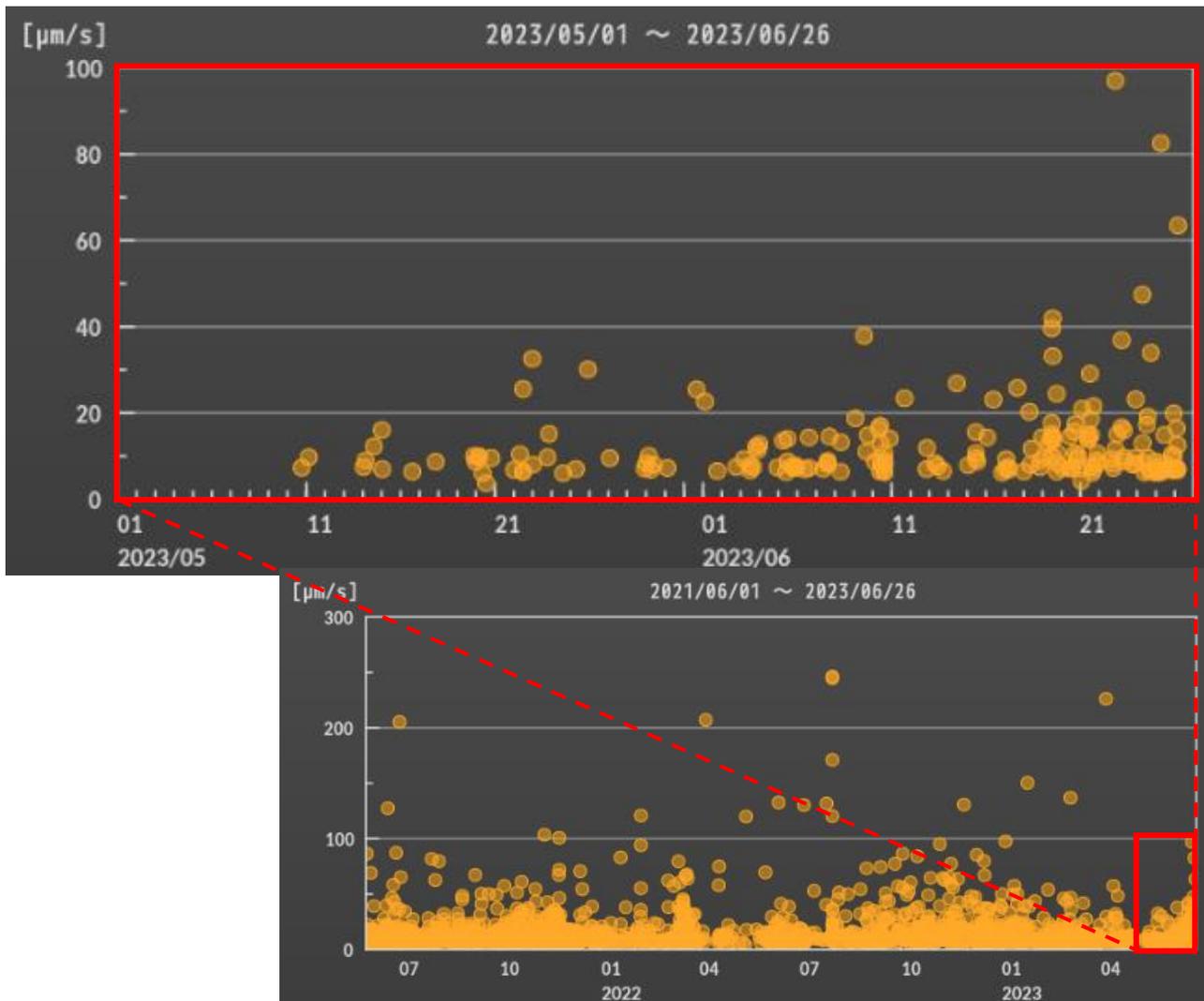


図 2-2 口永良部島 火山性地震の最大振幅 (上段 : 2023 年 5 月 1 日～26 日 05 時 00 分、下段 : 2021 年 6 月 1 日～2023 年 6 月 26 日 05 時 00 分、FDKL (京) 観測点上下動成分)

本日 05 時までには規模の大きな火山性地震は観測されていません。

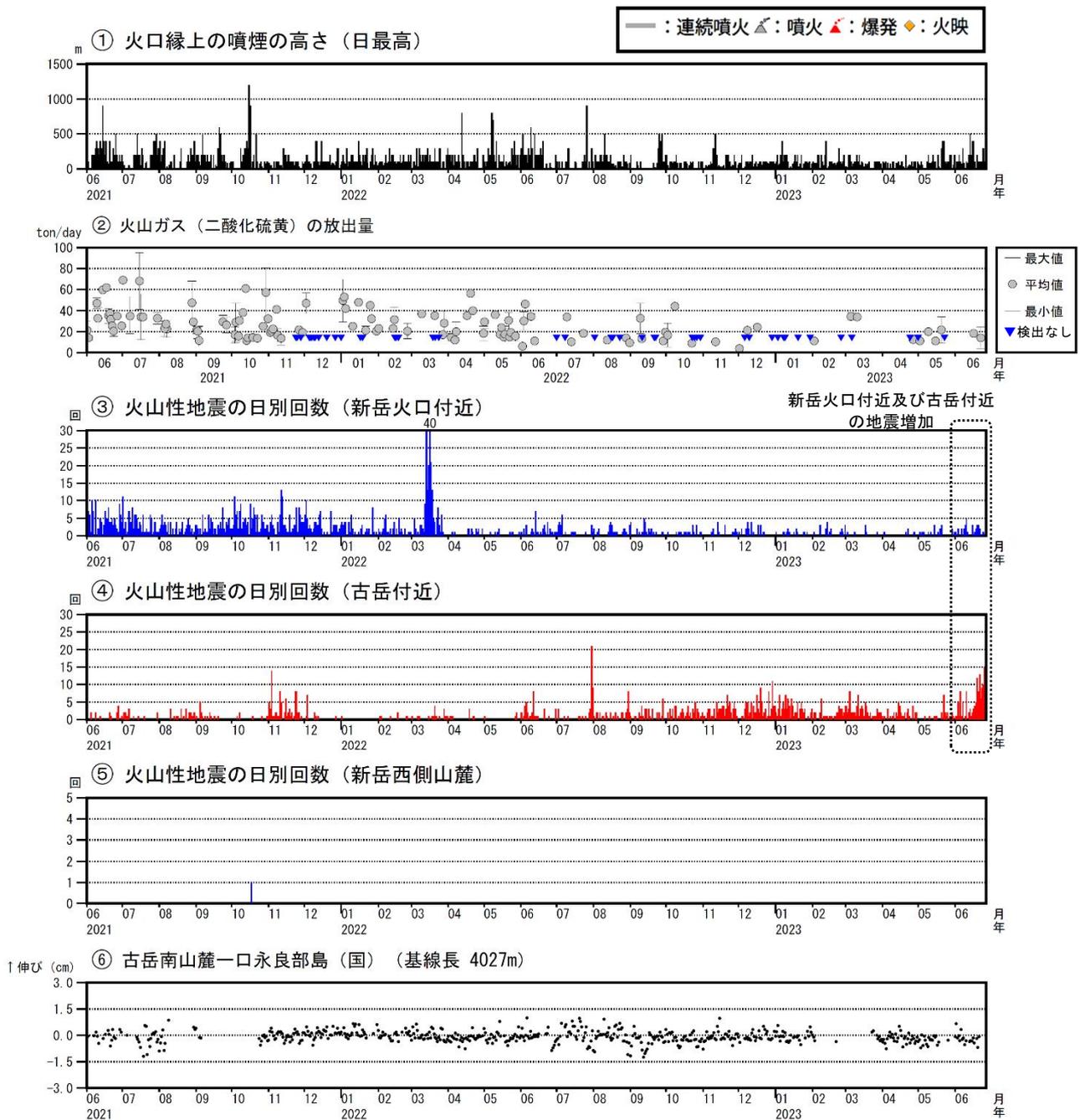


図3 口永良部島 最近の活動経過図 (2021年6月1日～2023年6月26日(速報値))
<6月の概況>

- ・白色の噴煙が最高で新岳の火口縁上500m(13日)まで上がりました。本日(26日)に入ってから雲のため不明ですが、昨日(25日)は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上100mまで上がりました。地震増加前後で噴煙の状況に特段の変化はありません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、1日あたりの火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は少ない状態が続いています(5月:検出限界未滿~20トン、6月:10~20トン)。
- ・火山性地震が17日から本日(26日05時時点)までの10日間で100回発生しています。火山性地震は山体の浅いところで発生しており、震源は主に古岳付近で、新岳火口付近でも時折発生しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されていません。
- ・GNSS連続観測では、特段の変化は認められません。

⑥の基線は図5の⑥に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
(国): 国土地理院

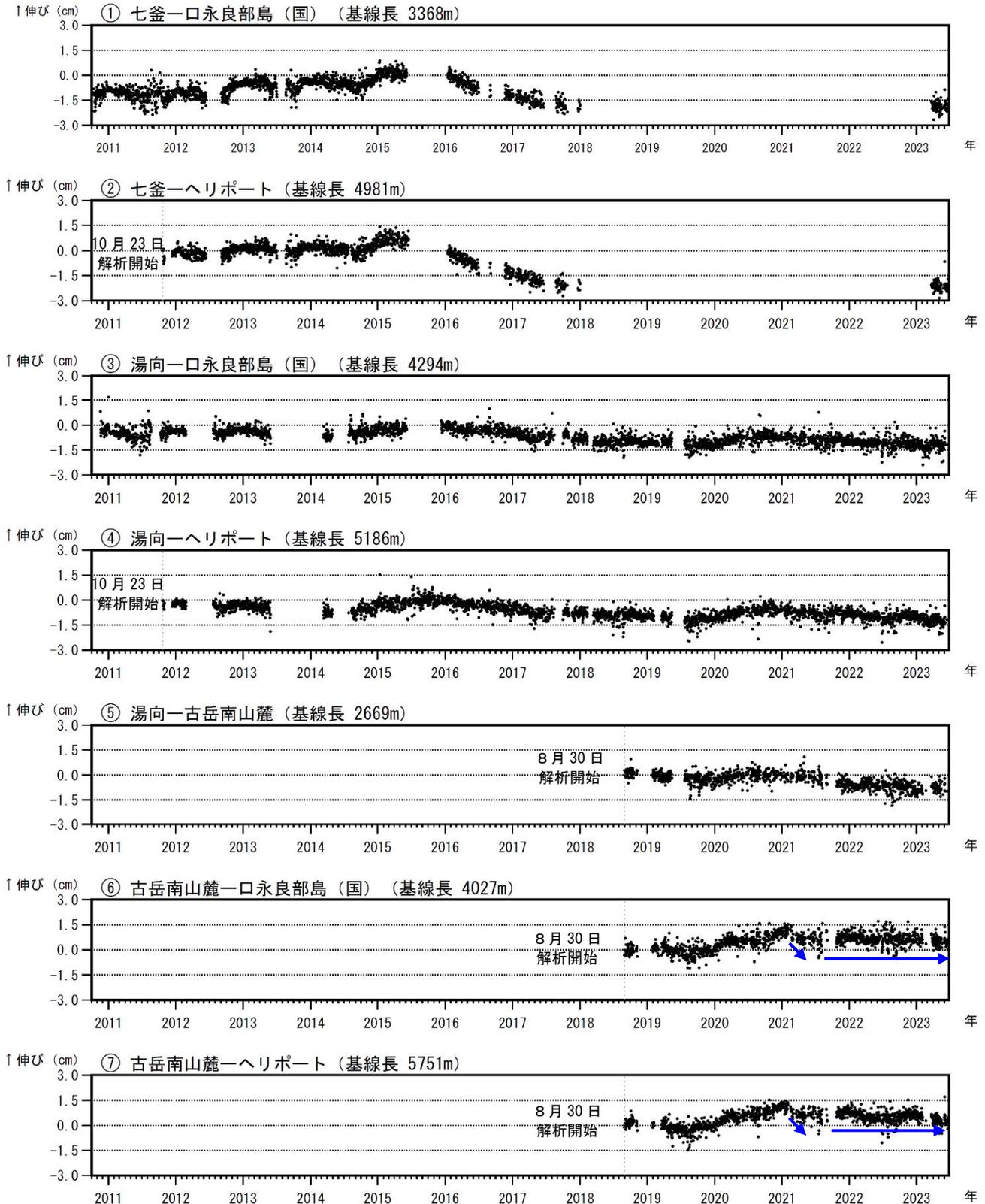


図4 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010年10月～2023年6月25日)

GNSS 連続観測では、2021年2月頃からみられていた基線の縮みは同年5月頃より停滞しています。

これらの基線は図5の①～⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

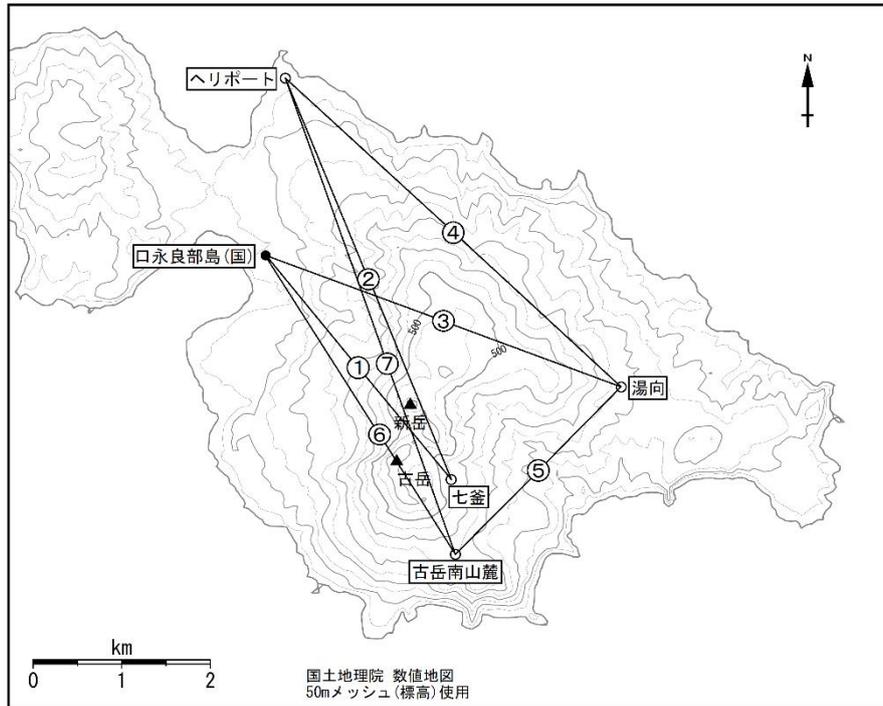


図5 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院

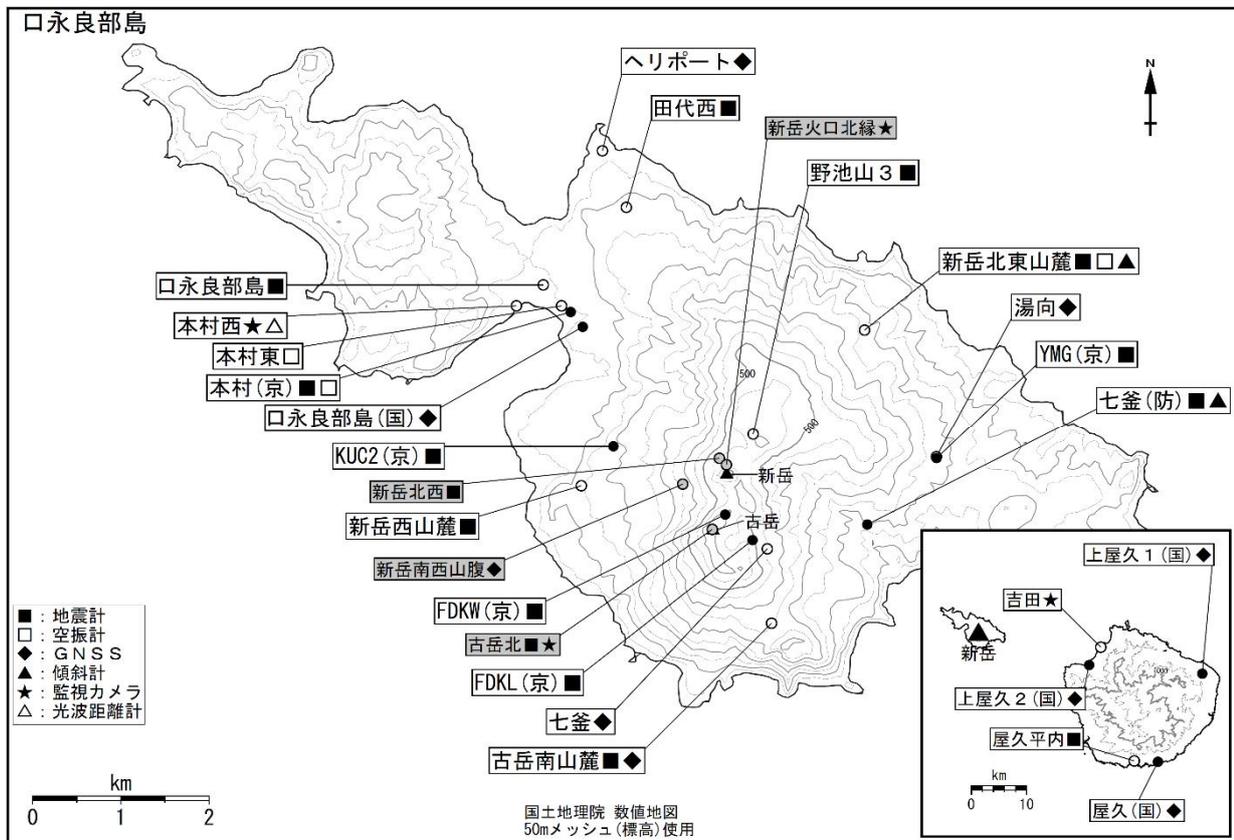


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。